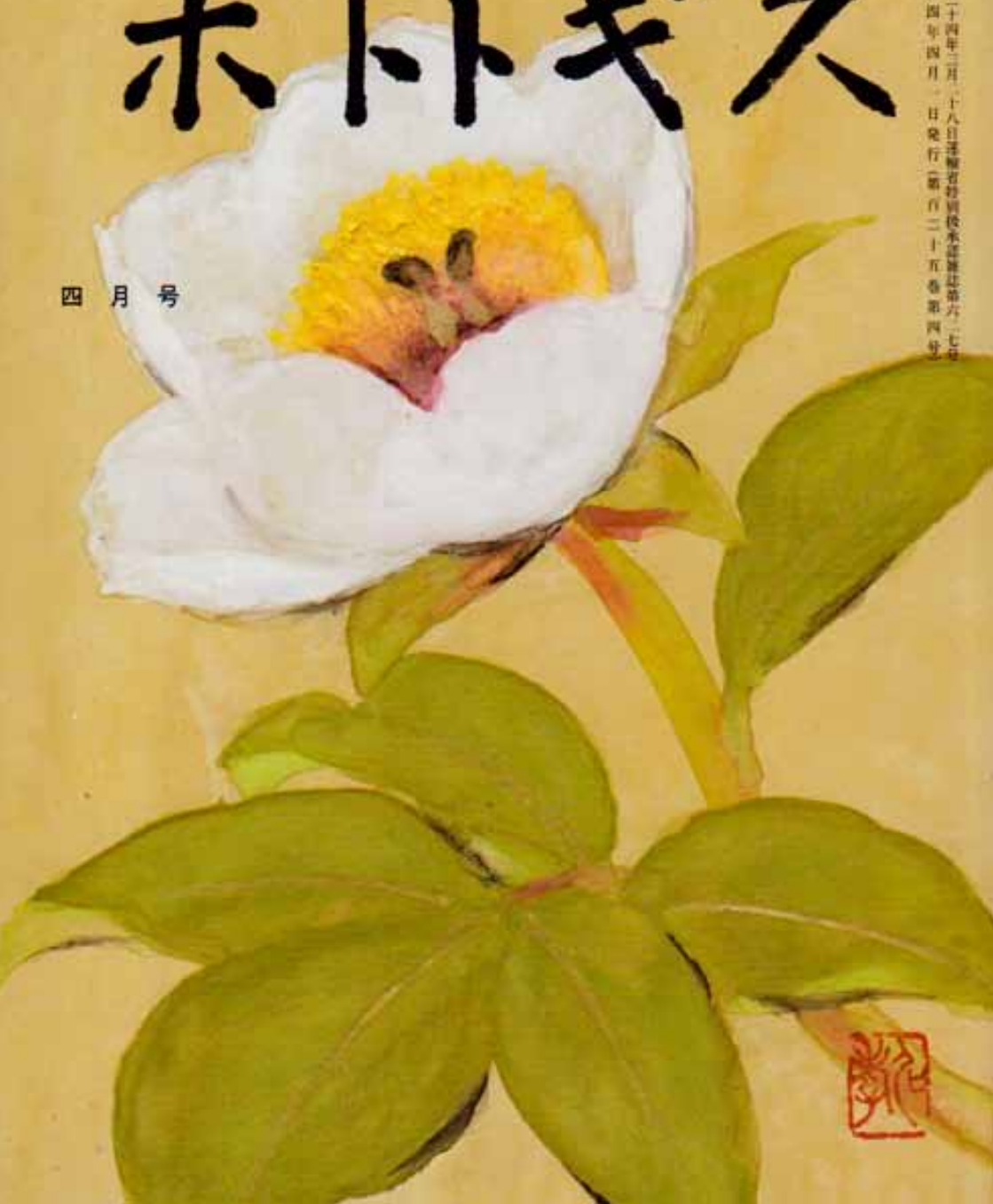


ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 逢坂五輪会館校舎本館第百二十七号
令和四年四月一日発行(第百二十五卷第四号)

ホトトギス

四月号



風雅の小筥（五十一）

廣太郎

先月は「ホトトギス発行所」が「合資会社ホトトギス社」となり、事務所は丸ビル八七六区であった事迄を書いた。この部屋が一番長かったとも書いたが、結局昭和二年九月が昭和四十年十一月迄の三十八年間の長きに渡り事務所を構えていた事になる。そしてこの間の昭和三十四年四月八日に虚子は亡くなり、年尾の時代となるのである。

勿論虚子は鎌倉から丸ビルへ、他に句会等の仕事の無い時は毎日出勤していたそうである。ある虚子を知る人から聞いた話であるが、虚子は生涯和服で通した事は有名な話で、ホトトギス社へも着物で出社していた。当時の丸の内界隈の和服率がどれだけか判らないが、やはり虚子晩年は、和服の人は珍しくなっていたのではないだろうか。そして一つのエピソードとして、鎌倉の自宅から鎌倉駅に行き、現在の横須賀線に乗ると、直ぐに履いていた袴を脱いでくるくと巻いて網棚に載せ、東京駅に着く前に又袴を履いて丸ビルの事務所へ向う、という日課であったそうだ。

さて、昭和四十年十一月に又丸ビルの中で移転をするのだが、その日はホトトギス誌に社告として掲載している。それは十一月十五日であった。そしてその移転した部屋というのが丸ビル「七五三区」という部屋で、この日は正に「七五三」の日で、部屋番号との対比が面白い。これは恐らくオナー会社とも相談した意図的な部屋と日付ではないかと思うが、この頃は年尾の時代で、何とも洒落た演出ではないだろうか。そして、この日から又この部屋での営業が始まるのである。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年四月一日 蕉心会

エープリルフルフル街騒裏返す
大人しく咲いて煩く散る桜
公園を過る日永の歩幅かな
公園の一隅占めて草若葉
うららかや木登りをする女の子
立ち並ぶ宴禁止の札うらら
蕉像の背ナの丸みや桜散る
花屑の点描画めく水面かな

四月二日 六甲会

風船を並べ屋台の出来上る
若芝に季節始まる汀子邸
満開の芦屋東京花は葉に
風船の飛んで宇宙を近付ける
苔と化す若芝稲畑汀子邸
魂入るるやうに風船膨らます

四月三日 芦屋ホトギス会

蝶縫れもつれ魔法の解けてゆく
春の月心配事も人の常
小齋を守り虚子忌を近づける

四月四日 野分会芦屋ハイブリッド句会

白き日曜日快癒を祈るのみ
魂の記憶留めて古巢かな
空蒼く山青く白衣の主日
遺されし古巢山気を閉ぢ込めて

グレゴリオオ聖歌白衣の主日祝ぎ

四月四日 青嵐会菅屋例会

嫁ぎ来て林檎の花を守る生活
出代も今年最後となる老舗
花林檎津軽訛の羽音寄せ

四月七日 三栄文化センター

カテドラル復活祭の人疎ら
バス降りてより入学の歩幅かな
春の雲高層ビルを撫でゆける
春の空切り取つてゐる摩天楼
森うらら都心のビルの狭間かな

四月九日 土筆会不在投句

病床の友を案じて春の昼
鹿尾菜刈るより波音の軽くなる
草餅に山氣練り込むより香る

四月十二日 朝日カルチャー若草句会

遠足の列の崩れるより芝生
山葵田の流れ奏でるイ長調
ライオンに来て遠足の列止まる
遠足の列都庁舎に吸ひ込まれ

四月十五日 登高会

花曇 大本山は工事中
富山湾不夜城めける蛭鳥賊
花曇みよし野人を遠ざけて
スイトピー天使の羽の絡みゆく
満天の星と競ひて蛭鳥賊
海面を燃やし尽して蛭鳥賊

四月十六日 廣邦会

鶯の笛半音上がり虚子忌かな
四月十六日 北國文芸選者吟

鶯が輪を描けば椿寿忌日和かな
四月二十五日 青嵐会東京例会選者吟

風船に天上といふ褥かな
若芝を越えて満塁ホームラン
初蝶に日差整ひゆきにけり
花林檎みちのく遠き静寂かな
新参に商都は門を開け放す

四月二十五日 野分会東京例会

赤い靴履く児へ白き日曜日
ハンガリーの朽ちて古巢となりゆけり
一枚の羽は古巢の未来秘め
白き日曜日聖歌は黙すまま

四月二十七日 若水句会選者吟

みよし野の花は如何にと風に問ふ
しやぼん玉恋の数ほど弾けゆく
淡き香を放ち煮あがる春大根
春大根土を抜け出す時の艶
短調に長調に揺れしやぼん玉
花に酔ひ花に疲れて吉野山
河川敷人を拒みて花万朶

四月二十八日 目黒学園句会

みよし野に人遠ざけて亀鳴けり
休耕田舞台となりて初蛙
街騒の減りゆく都心亀鳴けり
咲くものに色足してゆく草若葉
亀鳴くや三分前のこと忘れ

雑詠

廣太郎 選

桐一葉大地の音を消して落つ 静岡 須藤常央
 風よりも遠く一葉の落ちにけり 同
 一葉また口ミオに落ちて野外劇 同
 秋晴に割込んで来る軍用機 太宰府 持永真理子
 禅寺に置き忘れたる秋思かな 同
 レトロなる鞆に秋思詰め込みて 同
 青写真リリアン編んで待つ子かな 神戸 和田華凜
 一輪に一語の重み冬椿 同
 朴落葉天井高き飛驒の宿 同
 百万の石組城の冬構 奈良 古賀しづれ
 天に城地に黄落の大日向 同
 空濠の底の寂光枯尾花 同
 猪鍋の味噌に隠れし具沢山 京都 山崎貴子
 山里に猪鍋の湯気囲みけり 同
 遊廓の賑はひを知る枯柳 同
 秋声に呼び止められてゐる小径 龍ヶ崎 今橋真理子
 雲ひとつなき空に満つ秋の声 同
 大銀杏散り尽くしたる軽さかな 同

茶の花の蕊に染まつて行く夕日 神戸 玉手のり子
 雨音の句座茶の花の香を活けて 同
 西の市色の柑塙に酔うてをり 同
 種採つて齡ひとつを重ねけり 熊本 岩岡中正
 石路の花よりひろがつてゆく浄土 同
 なつかしき人のごとくに初時雨 同
 背景の枯木の向かうにも背景 香川 湯川 雅
 黄落の覆ふ日向と日陰かな 同
 寒風や心の渴く音のする 同
 猪鍋屋硝子の曇る古時計 神戸 藤井啓子
 琵琶湖より余呉湖は昏し浮寝鳥 同
 凧がなほシリウスの青磨く 同
 眉に足すうれひマスクの隠す分 東京 阪西敦子
 言ひ訳のごとくに卓の胡桃かな 同
 ささくれの白々立てる小春かな 同
 山の闇四方に迫りて葉喰 袋井 湖東紀子
 大根干し終へて一天仰ぎけり 同
 本尊は烏天狗ぞ花八手 同
 金風の小諸に虚子の三部作 長岡 安原 葉
 店頭の小子の写真も秋日和 同
 誘惑の鬼女に逢ひたき紅葉狩 同
 奮ひ立つ心老にもホ句の秋 相模原 木村享史
 会心の作はなけれどホ句の秋 同
 転びしは木の実ひとつに迂りしと 同

雑詠句評（三月号より）

ヒマラヤの塩で新米握りたる 西宮 本郷桂子

大綿の塵へと変はり身の早さ 前橋 伊藤涼志

新米の美味しさを見分けるのには塩で食するおにぎりが一番と
考えて作られた。

塩も海塩と岩塩があり違いがあることは当然である。作者は最も
美味しいと考えて普段使っている海塩でなく、海外からのお土
産であるヒマラヤ産の岩塩を使用した。おにぎりの形はヒマラ
ヤを想起する三角むすびであったであろう。

ヒマラヤの塩でおにぎりを作ったことに深い思い出があるので
あろう。（静龍）

専売では無くなり、最近は様々な種類の塩を味わえるようにな
ったが、握り飯はその塩の違いを楽しむのに打って付けだろう。
日本の塩では無く、海外の塩を使って握り飯を作られたところに
興味津々である。（廣太郎）

雪の降りそうな気配に浮遊する大綿。いかにも幻想的な風景の
中、舞い上ったかと思うと、ふと地上に降りて「塵」となった。
その瞬間を見落とさなかった作者の鋭い写生眼で、はかないの
ちの「大綿」がふつとこの世の無用のいのちなき「塵」と化して
しまったかなしみのようなものをとらえた一句。「変はり身の早
さ」といいとめて、しみじみとした無常を感じている作者である。

つまり、大綿のいのちが塵のいのちと化して果てた。それはど
りもおさず、人のいのちであって、作者はこの塵と化した大綿
に自分の運命といのちを重ねて詠んだ。このように対象のいのち
に己のいのちを重ねて詠むことが「写生」なのである。（中正）

気が付かなければ見逃してしまう大綿であるが、結構その気にな
ればこの季節よく日向をゆらゆら飛んでいるのを見付ける事が
出来る。そんな大綿の微妙な大きさと飛んでいる様子が的確に写
生されている。（廣太郎）

天地有情

心子選

露寒のつゝのる夕べの峰の寺 長岡 安原 葉
 落花生きりなくつまむ子を論す 同
 夏桑の漆黒といふ青さかな 東京 稲畑廣太郎
 伊予の風根岸の風や柿の花 同
 吹き晴れて四方の落葉の舞ひ上る 鎌倉 星野 椿
 冬菊を明日の客へと挿し直す 同
 客のなき日もある床屋花八手 神戸 三村純也
 おでんとて一見客はお断り 同
 光る湖車窓に冬の湖西線 芦屋 黒川悦子
 湖風に干す大根の太さかな 同
 石垣にブローチのごと帰り花 大阪 酒井湧水
 揺籠と化す小春日の環状線 同
 友の喪に服す思ひの初鏡 東京 今井千鶴子
 美しく生まれかかりし初鏡 同
 空回りしてゐる鬨志老の秋 相模原 木村享史
 秋惜むにも気がかりは病める人 同
 お地藏の面みなちがふ小春かな 神戸 和田華凜
 頭巾して浮世の人の声遠し 同

退院の日取り決まるや天高し 東京 河野昭彦
 同病の友の励まし身に入みて 同
 衿正し押す炉開の山家の戸 西宮 本郷桂子
 住み移りきし古民家の炉を開く 同
 切れかかる駅の一灯初時雨 香川 湯川 雅
 小暗きは書肆の落着き文化の日 同
 それぞれの境涯を知る秋の風 東京 高濱朋子
 女子とて斗酒なほ辞せぬ年忘 同
 幸せは此処にあるらし日向ぼこ 同 稲畑真喜子
 空へ向くそれぞれの顔冬芽あり 同
 ゆく秋や声しみじみと聞く電話 龍ヶ崎 今橋真理子
 照らし合ふ月と星あり冬に入る 同
 落葉茶屋神の日向に床几置き 奈良 古賀しづれ
 日のひとひら風のひとひら銀杏散る 同
 芽立ちつつ風の木立となりゆける 東京 今井肖子
 揺るる枝揺れざる枝や木の芽吹く 同
 山茶花の日記の如く咲き継ぎぬ 袋井 湖東紀子
 駆け込んで来る子に冬の匂ひかな 同